

上智大学グリークラブOB合唱団

Concert 2023

Sophia Glee Club Alumni Choir Concert 2023

2023年4月16日(日)
杉並公会堂 大ホール



本日はお忙しい中、上智大学グリークラブOB合唱団の「Concert2023」にご来場頂きまして誠に有難う御座います。

この数年新型コロナウイルス感染症拡大に悩まされて参りました。皆様の生活にもいろいろな影響があったこととお察し致します。当団は、2021年2月に「Concert2021」を開催する予定で準備しておりましたが、2020年3月から団員及び家族の健康を考慮し練習を中止、演奏会も中止せざるを得ませんでした。その後も練習を再開しましたが、感染がおさまらずやはり中止、と悩ましい時期が続きまして。ようやく昨年2月より感染防止対策を施し、団員の健康管理に留意しながら本格的な練習をスタートさせ、4回目の単独演奏会「Concert2023」に向け団員一同準備して参りました。改めまして、仲間と一緒に奏でるハーモニーの素晴らしさを痛感しているところでございます。本日は、新型コロナウイルス感染症対策に十分配慮させていただきましたので、ご来場の皆様には安心して音楽を楽しんでいただけるものと思っております。

今回も上智大学女声OG合唱団の皆様にご賛助いただき厚く御礼申し上げます。

最後となりましたが、日頃の私たちの活動を支えて頂いております岐部ホール他関係者の皆様にご場をお借りしまして心より感謝申し上げます。

今後とも皆様方のご指導、ご支援を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

上智大学グリークラブOB合唱団
代表 齊藤 久志



上智大学校歌

作詞 逸見 貞男 作曲 山本 直忠
編曲 北村 協一 改訂 多田 武彦

1	2	3
見よ永遠に 春蘇る	聞け黎明の 天翔りゆく	行け混濁の 闇打ち啓き
緑の樹響 高鳴るほとり	鶯の翼の 空打つひびき	鶯のみちびく 輝く方へ
やすらに憩う ソフィアの鶯の	はがいに集う 生命の群の	燃ゆる心に 固く結びて
まなざし射るは Lux Veritatis	めざす行手は Lux Veritatis	叫べとどろに Lux Veritatis
おお荘厳の学府 ソフィア	おお荘厳の学府 ソフィア	おお荘厳の学府 ソフィア
うるわしの アルマ・マーテル	うるわしの アルマ・マーテル	うるわしの アルマ・マーテル
ソフィア	ソフィア	ソフィア

第1ステージ

Ave Maria ~魂の救いの祈り~

指揮 太田 務

Cantus Gregorianus	(グレゴリオ聖歌)
G. P. da Palestrina	作曲
Anton Bruckner	作曲
Franz Biebl	作曲

第2ステージ

上智大学女声OG合唱団 (賛助出演)

指揮 栗原 寛
ピアノ 中島 由紀

「星のきらめくこの夜に」

作詞	栗原 寛
作曲	笠木 敦志
編曲	田中 達也

女声合唱とピアノのための「恋するとき、夢みるとき」

作詩	みなづき みのり
作曲	名田 綾子

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 花 | 2. 魔法をかけたい |
| 3. 今日も誰かが泣いたかな | 4. 悲しみ |
| 5. 雨の湊の子守唄 | 6. ひとりぼっちも悪くない |

~Intermission~

第3ステージ

イタリア愛歌曲集

指揮 篠崎 新一

Signore Delle Cime	Giuseppe De Marzi
Dove	Marco Maiero
Nanneddu Meu	Tonino Puddu
Fratello Sole,Sorella Luna	Riziero Ortolani
La Casa	Giuseppe De Marzi
Bènia Calastoria	Giuseppe De Marzi

第4ステージ

無伴奏男声合唱による日本名歌集 「ノスタルジア」

指揮 太田 務

編曲	信長 貴富
作曲	瀧 廉太郎
作曲	山田 耕筈
作曲	瀧 廉太郎
作曲	中山 晋平
作曲	中山 晋平
作曲	海沼 實

1. 花	作詩	武島 羽衣	作曲	瀧 廉太郎
2. この道	作詩	北原 白秋	作曲	山田 耕筈
3. 箱根八里	作詩	鳥居 忱	作曲	瀧 廉太郎
4. 砂山	作詩	北原 白秋	作曲	中山 晋平
5. 鈴をおさめて	作詩	時雨 音羽	作曲	中山 晋平
6. みかんの花咲く丘	作詩	加藤 省吾	作曲	海沼 實

🌀 曲目解説 🌀

Ave Maria ~魂の救いの祈り~

キリスト教の中でも最も愛されている祈りの一つ Ave Maria は、これまで数多くの作曲家の心にしみ入り、色々な作品が生まれ、各々の時代の形式に従って音楽史に大きな足跡を残している。

グレゴリオ聖歌の単旋律から始まった歴史は、ルネサンス期に模倣形式によるポリフォニーの頂点を極め、バロック期には言葉の内容がさらに重要視された作品が生まれた。古典派では比較的作品数は減っているが、この時代らしい貴族的な気高さを感じさせるものが、そしてロマン派では主観的で音響的にも豊かな作品が書かれている。20世紀からはさらに作風的には自由になり、色々な手段を用いて統一感を持たせる工夫が見られる。しかし、どの時代においても一貫して感じられるのは、テキストからにじみ出る聖母マリアに対する敬虔な祈りと救いへの歎願であろう。

本日の4曲はそれぞれ独特な作風と旋律の響きを持つ。

●グレゴリオ聖歌は、所謂モノフォニー(単旋律)である。一つ一つの言葉の響きとそれらが構成するフレーズが、まさに祈りとして唱えられる。まるで聖堂の中で振り香炉から出て来る聖なる煙の揺らめきのような神秘さを持つ。

●後期ルネサンスのイタリアの作曲家パレストリーナ(Giovanni Pierluigi da Palestrina, 1525 - 1594)は5曲のAve Mariaを書いている。今回選んだAve Mariaは、ルネサンス期に用いられた作曲技術である「定旋律(Cantus Firmus)」と「バラフレーズ(Paraphrase)」の技法の使用を示している。「定旋律」とは元になった旋律をそのまま用いるもので、ここでは曲頭で第二テノールがグレゴリオ聖歌の最初の7つの音から成る旋律をそのまま使っている。その後はフレーズの始めの数音を引用した後自由に書き換える、即ちバラフレーズによって統一感を出している。どのパートも旋律的な重要性を持つポリフォニー(多声音楽)であり、各旋律が紡ぎ合う楽音の美しさに魅力がある。

●オーストリアのロマン派を代表するブルックナー(Anton Bruckner, 1824 - 1896)の作品では、ポリフォニックな旋律美以上に、最低音の上に響く倍音を基準に構成されるホモフォニックな豊かな美に重点が置かれている。この作品は元々混声合唱のためのモテットであり、バスからソプラノの広範囲的ハーモニーの豊かさの理由は、彼が卓越したオルガニストであったことから理解できる。二重合唱と言う形をとり、よりハーモニーを充実させている。

●ビーブル(Franz Biebl, 1906 - 2001)はドイツの作曲家である。彼のAve Mariaの魅力は、その優しく包み込むようなハーモニーにある。それはトーン・クラスター(ここでは八長調の音階の中で隣り合った数音)のホモフォニックな響きによって演出される。ビーブルは彼の知人の消防士で構成された合唱団のためにこの作品を書いた。よってオリジナルは男声合唱と言うことであるが、後に混声合唱と女声合唱もビーブル本人によってアレンジされている。しかし、音域的に密集してかつ倍音を引き出しやすい男声合唱が、トーン・クラスターの良さを最高に引き出している。トリオによる小アンサンブルとバック・コーラスの織り成すハーモニーが美しい。

太田 務

Ave María, grátia pléna,
Dóminus técum,
benedícta tu in muliéribus,
et benedíctus frúctus véntris túi, Jésus.

アヴェ・マリア、恵みに満ちた方
主はあなたとともにおられます。
あなたは女のうちに祝福され、
ご胎内の御子イエスも祝福されています

Sáncta María, Mátér Déi,
óra pro nóbis peccatóribus,
nunc, et in hóra mórtis nóstræ. Amen.

神の母聖マリア、
わたしたち罪びとのためにお祈りください
今も、死を迎える時もお祈りください アーメン

(以上 日本カトリック司教協議会 2011.6承認口語訳)

Sáncta María, Regína cæli,
dúlcis et pía, o Mátér Déi,
óra pro nóbis peccatóribus.
Ut cum eléctis te videámus.
Amen.

聖なるマリア、天の後、
優しく真心深き方、神の御母よ、
わたしたち罪びとのためにお祈りください。
天に上げられし人々とともに、あなたを仰ぎ
見られますように。アーメン



グレゴリオ聖歌
ネウマ譜



「受胎告知」
レオナルド・ダ・ヴィンチ